

児童劇映画「フクロウ人形の秘密」の制作に当たって

脚本・監督／株式会社映学社代表取締役

高木 裕己

「罪を犯した人がこんな素敵な作品を作れるなんて……。」

私は小学生の女の子が書いた作文の中の一言に強く心をひかれ、児童劇映画にしたいと思いました。この作文は、第68回「社会を明るくする運動」作文コンテストで法務大臣賞を受賞した「気付いたことー心に寄りそえる人にー」です。

これを基に制作した作品「フクロウ人形の秘密」は、刑務所の敷地内にある作業製品展示即売所にたまたま立ち寄ってフクロウ人形を見つけた少女の物語です。その人形は、黒い木の胴体に黄色の眼がある、少女にとっては大変魅力的なフクロウでした。

少女は、その時即売所にいた女性刑務官に、フクロウ人形がどの

ようにして作られたのか、いきさつを聞き始めます。そして、この人形が受刑者の更生を目的とした教育プログラムの一環として作られたもので、受刑者はこのような作品を一生懸命作ることで心がつち着いていく、ということを知っていきます。

「私は犯罪者というのは、心のない凶悪な人と思っ込んでいますが、このような人形を夢中になつて作れるんだから、もともと善良な心の持ち主だったかもしれないと思うようになった。…そして私はなぜ彼らが罪を犯してしまつたのか知りたくなつた」と、少女は語り始めます。

児童劇映画は、子どもを主人公にし、その子どもの視点でドラマ

を描いていく世界です。そこで、シナリオを作成するに当たって、作文の中で心の動きがよく表現されている文章をできるだけ拾い上げ、映画の随所に取り入れていきたいと考えました。

次のステップは、作文の文章の行間にどのような映像を入れていくかです。現在、刑期を終えても、職と住まいを確保できず、再び犯罪に手を染めてしまう人が2人に1人はいるといえます。

安全安心な社会を実現するには、再犯や再非行をできる限り少なくすることが重要です。そのためには保護司の力が必要とされます。そこで私は、少女の作文を縦軸に、保護司の活動を横軸にしていけば、立体的構造的なストーリーを描いていけると確信しました。

実際に保護司の方を訪ね、いろいろ話をお聞きしました。保護司は、受刑者が仮釈放されることを事前に知らされます。その後、引受人（家族など）と話し合つて受け入れる準備をしたり、本人の就職・社会復帰のサポートをしたり、就職後にも本人の勤

務状況などについて、保護者の立場で雇用主と面談したりします。

これはなかなか一般の人から見えない地味な仕事ですが、犯罪や非行をした人の立ち直りを支える大切なボランティアの仕事なのです。

そんな保護司にとつてうれしいことはただ一つ、以前に担当した本人が立派に社会復帰を果たし、挨拶に来てくれることだといえます。



最後に少女は、安全な社会のために自分ができることは何かを考えたながら作文をまとめます。

この作品は、インド・フレンチ国際映画祭最優秀児童映画賞やホードウ国際映画祭最優秀児童短編映画賞、コルカタ国際文化映画祭特別功労賞など数多くの栄誉ある賞を賜りました。